

戦時下の少年時代

小郡市 津留 達司

小学校3年生の冬、教室の中でそれぞれが勝手に騒いでいると、突然スピーカーから軍艦マーチが流れて来た。一瞬、静寂となり耳をすますと『臨時ニュースを申し上げます。帝国陸海軍は本8日未明、西太平洋に於いて米英両国と戦闘状態に入れり』と放送されたではないか。米英といえば子供心にも大国であることぐらいは臆気ながら聞いて知っていたので、今後どうなるのか不安だった。

しかし、この不安を吹き飛ばすかのように、真珠湾の攻撃で特殊潜航艇に乗った九軍神の活躍により、敵艦船に大なるダメージを与えたニュースは、国中を狂気乱舞させたものだ。どうしてだかわからないが、身体中の血が湧き上がるものを覚えた。学校では週に1、2回、全校生徒を講堂に集め、校長先生より各地に於ける我軍の戦果を詳細に聞かされ手を叩いて喜んだものだ。戦局は益々有利となり、時々引率されて見に行く映画は、必ず戦争映画であり、日本軍の勝利するものばかりであった。中でも、特に私達を刺激したのは予科練のカッコ良さであった。七つ釦に短剣を吊り、白い手袋をした凛々しさ、チャックの沢山付いた飛行服を身に纏い、短靴を履いて真っ白なマフラーを巻いた姿に憧れた。映画の帰りには興奮し、一日も早く予科練に入り戦闘機に乗って御国のために花と散ることを夢見ていた。

当時、子供の遊びといえば、メンコ、ビー玉、独楽（こま）等、夏にはプール以外にも堤、池、川に黒の『キンツリ』を肩からぶら下げて泳ぎに行く。水泳禁止区域等どこにも無かったが、水の事故は聞いたことが無かった。近所にはワルガキがいて危険な場所を前もって教えてくれたものだ。この池のこの辺りに水門があるから近付いてはいけないとか、ここは流れが早いから危険だと教えてくれる。このようにして後輩に伝えて行くことが伝統となっていた。

断然有利かと思われていた戦局が次第に怪しくなってきた。5年生の頃から校庭の隅とか校舎と校舎の間に防空壕を造るようになる。深さ1m、幅1m、長さ10m位の穴を掘り、天井には丸太棒を載せ、その上にごさ等を敷き、最後に土を被せるものであった。雨上りには、水が一杯溜まっていた。卒業するまで一度も入ったことは無かった。

戦時中の登下校は隣組単位で行動し、上級生が下級生達を引率して行くことになっていた。女生徒はモンペをはき、防空頭巾を被って胸には住所氏名を書いた名札を縫い付けていた。男生徒も頭巾は携行していた。履物のズックは一クラス一年に数足しか配給が無かった。ある夜突然、空襲警報のサイレンが鳴り出したので、慌てて予め庭に穴を掘っていたので畳を剥いで穴の上に被せ退避した。母は助産婦だったので近くの病院に救護班として詰めなければならず、空襲の都度、「今度は最後かも知れないね」と言って水盃を交わし残された子供達のことを心配しながら出掛けて行った。

昭和20年4月、夢と希望に燃えて中学に入った。最初に支給された帽章は『真鍮』では無

く焼き物であり、帽子は戦闘帽、襟章は黒の布地に黄色で刺繍されたもので洋服は草色の国民服であった。

戦局は益々不利となり、毎日毎晩空襲警報に悩まされた。試験の最中に空襲警報が発令され、防空壕に避難することたびたびであった。

1、2、3年生は農家の稲刈、または開墾作業、飛行場を造るために河川敷の芝剥ぎ等、軍隊に行っていない4、5年生は各地の軍需工場に駆り出されていた。学校の正門前に小さな丘があり、高射砲陣地が配備されたので陣地造りをしたが、コンクリートの台に今まで見たこともない大きな高射砲がずらりと並んだ姿は壮観であった。兵隊さんが砲弾を大事そうに磨いていたのが印象的であった。

ある朝雨天体操場で朝礼が始まっていた時、突然空襲警報と同時に高射砲と機関砲を撃ち出した。窓硝子がバリバリと音を立てて割れだした。全員急いで裏山の防空壕に避難する。夜の空襲にも慣れてきたので、防空壕にも入らずに空を見れるように度胸がついた。サーチライトに照らし出されたB29爆撃機の編隊がくっきりと夜空に映し出され、悠々と上空をわがもの顔に飛来している。

暑い、お盆の正午（15日）だった。

近所の煙草屋さんの縁側に大人が4、5人神妙な顔付でラジオの前に正座している。何事かと思っていると放送が始まりだした。玉音放送らしいが雑音と性能の悪さで、さっぱり聞き取れないのでボーッとして聴き終わると、大人達が涙を流して「戦争に敗けた」「日本は敗れた」という。

神国日本に神風は吹かないのか、私達はどうなるのか、どうしたらよいのか。

この夜から気持ちが悪い程静かになった。電灯の笠に掛けた覆いも外したので明るくなった。母も救護班として出ていかずに済むので私達も心細い思いをしなくて済む。

数日後、動員に行っていた姉がリュックサックを背負い、顔に煤を塗ってかえてきた。

占領軍が上陸して来るので、若い女性は危険だからこのようにしたと言っていた。

戦後の食糧難時代がやってきた。学校では昼休みが一番辛かった。弁当等当然持っていない。銀シャリを食べているのは農家、炭坑の息子達である。隣の席にいたのでは腹の虫がなく、外に出て木陰の下でゴロ寝したり、雑談するぐらいで運動なんかできる訳が無い。

やがて、学業半ばにして予科練等に行った人達が復校して来た。

毎朝、汽車通学生の者は路線別に呼び出され、「お前等はたるんでいる」といっては殴られたり、腕立て伏せ等の制裁を加えられ、泣きながら教室に帰って来る。

彼等にすれば、敗戦によるやり場の無さを殴ることによって鬱憤を晴らしていたのかも知れない。数か月後に卒業したので、やっと静かな学園が戻って来た。